筑波大学における日本語漢字教育の理念と実践
―BASIC KANJI BOOK シリーズによる漢字の授業 ―

加納　千恵子

要　旨

本稿は、1989 年に筑波大学留学生教育センター（後の留学生センター、現在のグローバルコミュニケーション教育センター）で使用するために開発された漢字の教科書『BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 vol.1&2』および『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢字 1000PLUS vol.1&2』の教育理念と、それらを使って行われてきた漢字クラスの実践について総括して報告するものである。時代とともに教科書に記載されている言語素材は古くなっていく面もあるが、表語文字である漢字の特性を活かし、語彙教育の一環として漢字教育を捉えるという教育理念と実践の工夫は今後も通用すると思われる。

【キーワード】漢字教育　教育理念　実践の工夫

Education Policy and Practice for Teaching Japanese Kanji at the University of Tsukuba：
Kanji Classes Using *BASIC KANJI BOOK* Series

KANO Chieko

【Abstract】The author explains the education policy of “BASIC KANJI BOOK Vol.1 & 2” and “INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol.1 & 2”, which were developed for teaching kanji at the Education Center for Foreign Students of the University of Tsukuba (later called the International Student Center, and at present called the Center for Education of Global Communication), and reports on actual practice in kanji classes. While the material data in the textbooks may become out-of-date, the education policy and well-designed practice for teaching kanji as a part of teaching vocabulary will continue to be of use in the future.

【Keywords】kanji teaching, education policy, well-designed practice

1．はじめに

グローバルコミュニケーション教育センター（旧留学生センター、1992 年以前は留学生教育センター）の日本語教育部門で開設している漢字クラスで使用されている教科書『BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 vol.1&2』（凡人社 1989、以下 BKB と略す）および『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢字 1000PLUS vol.1&2』（凡人社 1993/2001、以下 IKB）は、外国人日本語学習者が習得困難と感じる漢字および漢字語彙の学習を効率的に支援するという目的で開発されたものである。特に BKB は、非漢字圏からの国費留学生のための集中予備教育コースで使用することを念頭に、日本語教育のための「基本漢字」500 字を選定し、表語文字である漢字のオリエンテーションを適宜加えながら、初級で学ぶ漢字と漢字語彙について品詞別・トピック別にその読み書きと意味用法を学習させていくように設計されているところに特徴がある（加納ほか 1988, 加納ほか 2011）。また、中級以降の学習者を対象とする IKB では、本学にいる中級、上級の非漢字圏および漢字圏学習者にとっての様々な漢字学習の困難点をそれぞれ克服させることを射程に入れ、体系的な漢字語彙学習を支援するための教材を目指し（加納 1994, 2000）、一定の成果をあげている。

しかしながら、これらの教科書が刊行されてからすでに 30 年近くが経過しており、時代とともに本学センターで学ぶ外国人学習者の出身、身分、学習目的、ニーズなども変化してきている（魏・加納 2012）。その間、BKB・IKB のシリーズを漢字クラスの主教材としながら、その使用方法や教え方については、漢字クラス担当の教員によって、多様な学習ニーズに合わせた様々な工夫がなされ、副教材なども作成されてきた。それらの漢字教育の実践の工夫は、本センター論集にも数多く報告されている（カイザー 2004, 加納 2004a, 2004b, 鄭・柳田 2013, 平形 2013, 石田 2014, 鄭・中尾 2015, 中尾 2016）。

教科書に記載されている言語素材は古くなっていく面もあるが、表語文字である漢字の特性を活かし、語彙教育の一環として漢字教育を捉えるという教育理念とこれまでの実践の工夫は、今後も通用すると思われる。そこで、これらの漢字教科書の開発の経緯を振り返るとともに、これまでの本学センターにおける日本語漢字教育の理念と実践の工夫について整理し、総括して報告したい。今後の漢字教育に役立てていただければ幸いである。

2．漢字教科書 BKB の理念と初級漢字クラスの実践

加納ほか（1988）で述べたように、３種の新聞における使用頻度上位 500 字の漢字で全体の約 80％がカバーされるという国立国語研究所の報告（1976）を受け、大学および大学院での勉学や研究を目的とする、特に非漢字圏からの初級日本語学習者を対象と

した漢字の教材としてBKBを開発した。新聞などの知的情報が読み取れる日本語力を養成すること、そして、専門分野の研究領域で将来学習者に必要とされる日本語力の基礎を築くことを学習目標と定め、そのための基本漢字500字を選定した。

２．１　BKBの開発理念

初級での達成目標である漢字500字の選定には、国立国語研究所（1976）による新聞での使用頻度も考慮したが、まずは漢字を全く知らない非漢字圏学習者に対して、平仮名や片仮名のような表音文字とは異なる、表語文字としての漢字の特性に関してオリエンテーション的説明を行う必要があると考え、以下のような手順で漢字の選定を行った。

１）漢字の成り立ちや表意性を教えるための漢字
２）漢字の構成要素、字形構造を教えるための漢字
３）初級の基礎語彙に使われる漢字（特に動詞、形容詞、名詞などの品詞性や送り仮名などを教えるための漢字）
４）使用頻度の高い熟語に使われる漢字

BKBの１課から７課までを使って、上記１）の漢字の成り立ちや表意性を教えるための漢字の導入を考えた。それらは、字形から意味が推測しやすい漢字、いわゆる象形文字や指事文字、会意文字などを指している。具体的には、1課と2課で「絵からできた漢字」として「日、月、木、山、田、人、口、車、門（L1)」および「火、水、金、土、子、女(L2)」を導入するが、同時に、それらの学習漢字を使って初級でも文が作りやすいように、使用頻度の高い漢字として「学、生、先、私（L2)」を配置した。3課では、「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、万」という漢数字と、それらといっしょに使える漢字「円、年」を、4課では意味概念を表す記号的な漢字「上、下、中、大、小、本、半、分、力」に加えて、1課から4課までの既習漢字語を使って質問文が作れるように「何」を入れた。5課では、漢字の組み合わせでできる漢字として「明、休、体、好、男、林、森、間、畑、岩」を導入した。6課と7課では、他の漢字の部首となる字形を持つ漢字として「目、耳、手、足、雨、竹、米、貝、石、糸（L6)」と「花、茶、肉、文、字、物、牛、馬、鳥、魚(L7)」を取り上げた。このような漢字の中には、それ自体の使用頻度はそれほど高くなく、初級では語彙として教えられないものもあるが、これらの学習により、漢字の表意性を理解しながら、漢字の字形には構造性があること、漢字には訓読みと音読みが存在することなどを認識させるのが学習のポイントである。

BKBの8課から10課までは、３）の初級の基礎語彙に使われる漢字として、「新、古、長、短、高、安、低、安、低、暗、多、少（L8形容詞)」、「行、来、帰、食、飲、見、聞、読、書、話、買、教（L9動詞)」、「朝、昼、夜、晩、夕、方、午、前、後、毎、週、曜(L10時の名詞)」という、初級で教えられる頻度の高い語彙に使われる漢字の導入を図っ

た。中には、書くためには画数が多くて難しく、読めればよいのではないかという漢字も含まれているが、語彙として使う際に送り仮名に注意して覚えてほしいもの、意味概念としてセットで覚えてほしいものをまとめて導入するという方針で選んだ。

BKB の 11 課から 14 課までは、2）の漢字の字形構造を教えるための漢字として、「作、泳、油、海、酒、待、校、時、言、計、語、飯（L11 へん、つくり)」、「宅、客、室、家、英、薬、会、今、雪、雲、電、売（L12 かんむり、あし)」、「広、店、度、病、疲、痛、屋、国、回、困、開、閉（L13 たれ、かまえ)」、「近、遠、速、遅、道、青、晴、静、寺、持、荷、歌 (L14 にょう、形声文字の音符)」を選んだ。体系的な字形教育を考えての配置であったが、構成要素となる部首の導入が時期的に早すぎるのではないかという課題もある。

BKB の 15 課以降は、 4）の使用頻度の高い熟語に使われる漢字を、できるだけ語彙の意味的ネットワーク、文法的用法などのまとめになるように配置して導入することを試みた。語彙の意味的ネットワークを考えて漢字を選んだ課は、15 課「人の関係をあらわす漢字」、18 課「位置をあらわす漢字」、20 課「行政区分をあらわす漢字」、23 課「趣味の漢字」、25 課「日本の結婚式」、26 課「日本の四季」、28 課「テスト問題」、29 課「大学の入学試験」、31 課「旅行」、32 課「駅などで見る表示」、33 課「町で見る表示」、34 課「物の名前と総称」、35 課「経済で使われる漢字」、36 課「感情を表す漢字」、39 課「空港建設」、40 課「地理で使われる漢字」、42 課「大学のカリキュラム」、43 課「変化を表す漢字」、44 課「抽象概念を表す漢字」であり、10 課「時をあらわす漢字」を加えると 20 課分がこれに相当し、全体の約 44％を占めている。

文法的用法を整理する目的で漢字を配置した課は、16 課「形容詞の漢字 -2-」、17 課「動詞の漢字 -2-」、19 課「接辞の漢字 -1-」、21 課「動詞の漢字 -3-」、22 課「漢語 -1-」、24 課「動詞の漢字 -4-」、27 課「接辞の漢字 -2-」、37 課「動詞の漢字 -5-」、38 課「形容詞の漢字 -3-」、41 課「漢語 -2-」、45 課「接辞の漢字 -3-」であり、8 課「形容詞の漢字」と 9 課「動詞の漢字」と合わせると、13 課分で全体の約 29％を占める。ただし、19 課は場所の接辞、22 課は科目の漢語、45 課は抽象的概念の接辞と考えれば、語彙の意味的ネットワークとも重なる。

30 課「部首 -5-（手へんとさんずい)」は、11 課～ 14 課で紹介された部首導入の課の延長線上にある課であり、1 課～ 7 課と合わせて 12 課分（約 27％）がオリエンテーション的な内容に相当すると言えよう。

このように、それぞれの課の漢字を選ぶ際には、新聞における使用頻度の高さとともに、漢字のオリエンテーション的な解説、意味的関連によるグルーピング、そして文法的用法による整理なども考慮に入れたため、結果として使用頻度が高くても入れられなかった漢字もある一方で、それほど使用頻度が高くないが入れることになった漢字もあるというのが実情となった。

２．２　BKB を使用した初級漢字クラスの概要

本センター―で開設する技能別漢字クラスのシラバス、カリキュラムを立てるに当たっては、２．１で解説したような理念で開発された教科書を主教材とすることを考慮し、初級前期の漢字クラスの概要は表１のようにした[1]。

表１　初級前期漢字クラスの概要

レベル	補講漢字１(10 週)／総合漢字１(15 週)
初級入門	[教材] Basic Kanji Book vol.1 L1 ～ L11 [学習目標] ・漢字の表意性を理解し、字形の識別、字形構造の識別などができる ・日常生活においてよく目にする漢字を調べたり、その覚え方を工夫したりすることができる [学習項目] ・曜日（日月火水木金土　L1,2） ・数字（一二三四五六七八九十百千万　L3） ・位置（上中下前後　L4, L10） ・漢字の組み合わせ（明休体好男林森間畑岩　L5） ・体の部分（口目耳手足　L6） ・生物（人女男子牛馬鳥魚貝　L1-7） ・基本形容詞（大小新古長短高安低明暗多少 L8） ・基本動詞（行来帰食飲見聞読書話買教作泳待　L9） ・時の名詞（朝昼晩夜夕方午前後毎週曜日月年時分　L10） ・部首 [偏、傍、冠、脚、垂、構、遶] と字形構造（L11） [学習・教育方法] L1,L2 は漢字の表意性を解説しながら書き方を指導する L3 ～ L7 は漢字の成り立ちなどのオリエンテーションとして指導する L8 以降は、初級語彙として文中で使わせながら指導する L11 は次のレベルにつなげるため、漢字の字形構造に気づかせる ※詳しくは漢字２で学ぶため、紹介のみでよい

レベル	補講漢字 2(10 週)／総合漢字 2(15 週)
初級前期	[教材] Basic Kanji Book vol.1 L11 ～ L22 [学習目標] ・漢字の字形の構造性を理解し、部首、音符などがあることがわかる ・漢字に訓読みと音読みがあることがわかる ・日常生活や学生生活においてよく目にする漢字を調べたり、その覚え方を工夫したりすることができる [学習項目] ・へんとつくり（人べん、さんずい、言べんなど　L11） ・かんむりとあし（ウ、草、雨かんむり、人やね、人あしなど　L12） ・たれとかまえ（まだれ、病だれ、国づくり、門構えなど　L13） ・にょう、形声文字の音符（しんにょう、［青］［寺］［可］など　L14） ・人、家族の漢字（L15：友父母兄弟姉妹夫妻彼主奥） ・形容詞の漢字 2（L16：元気有名親切便利不若早忙） ・自他動詞の漢字（L17：出入乗降着渡通走歩止動働） ・位置関係の漢字（L18：右左東西北南外内部駅社院） ・接辞 -1- 場所（L19：地鉄工場図館公園住所番号） ・住所の漢字（L20：市町村区都府県島京様） ・する動詞の漢字（L21：練習勉強研究留質問題答宿） ・科目の漢語 -1-（L22：政治経済歴史育化理科数医） [学習・教育方法] L11-L14 は漢字の構造性を解説しながら、学習者が知っている漢字の部首の見分け方を指導する L15 ～ L22 は、漢字語彙として文中で使わせる指導をする このレベルでは、訓読みと音読みの読み分け練習をしたり、テキストだけでなく学習者の身の回りの漢字を辞書などで調べる練習をしたり、学習方法を工夫する

本センター―で現在開設している漢字クラスには、短期留学生を対象とする総合漢字クラス(15 週で 1 単位)と、大学院の研究留学生や正規生等を対象とする補講漢字クラス(10 週で単位なし）とがあり、シラバスとしては共通のレベルを想定しているものの、学習期間の長さが異なるため、各レベルの学習目標を念頭におきながら、実際には、受講者にとって無理のないカリキュラムやスケジュールを立てるように担当者に依頼している。特に「漢字 1」クラスにおいては、漢字学習にとって必要なオリエンテーション的な説明を行い、漢字嫌いを作らないようにガイドすることが最も重要であり、「漢字 2」クラ

ス以降においては、受講者が自分で自律的に漢字学習を進めていけるように慣らすことが主眼であるため、ノルマをこなすだけの機械的な授業にならないよう留意する必要がある。本センター―の初級中・後期の漢字クラスの概要を表２に示す。

表２　初級中・後期漢字クラスの概要

レベル	補講漢字３(10 週)／総合漢字３(15 週)
初級中期	[教材] Basic Kanji Book vol.2 L23 ～ L35 [学習目標] ・初級の漢字語彙を覚え、音読みと訓読みの読み分けができる ・漢字を使ったやさしい読み物が読め、簡単な文を書くことができる [学習項目] ・趣味の漢字（L23：映画写真音楽料組思色白黒赤） ・反対の動作の漢字（L24：起寝遊立座使始終貸借返送） ・結婚の漢字（L25：結婚離席欠予定洋式和活） ・四季の漢字（L26：春夏秋冬暑熱寒冷暖温涼天） ・接辞 -2- 仕事の漢字（L27：仕事者運転選記議員商業農） ・テスト問題の漢字（L28：良悪点正違同適当難次形味） ・入学試験の漢字（L29：試験面接説果合格受落残念） ・手へんとさんずいの漢字（L30：指折払投打深洗流消決） ・旅行の漢字（L31：旅約案準備相談連絡泊特急） ・駅で見る漢字（L32：線発到交機関局信路故注意） ・町の表示の漢字（L33：押引割営自由取求願知） ・物の総称の漢字（L34：台窓具器用服紙辞雑誌） ・経済の漢字（L35：銀資品個価産期々報告） [学習・教育方法] このレベルでは、漢字の音訓の読み分け（単字の場合は訓読みの和語、熟語の場合は音読みの漢語が多い）を指導し、学習した漢字を使って作文させたり、辞書を引きながら読み物を読ませたりする練習を行う

レベル	補講漢字４(10 週)／総合漢字４(15 週)
初級後期	[教材] Basic Kanji Book vol.2 L36 ～ L45 [学習目標] ・初級後半の漢字語彙を覚え、音読みと訓読みの読み分けができる ・漢字を使った読み物を辞書を使いながら読め、簡単な作文を書くことができる [学習項目] ・感情表現の漢字（L36：心感情悲泣笑頭覚忘考） ・自他動詞の漢字（L37：伝代呼焼曲脱別集並喜驚） ・形容詞の漢字 -3-（L38：細太重軽狭弱眠苦簡単） ・空港建設の漢字（L39：空港飛階建設完成費放） ・地理の漢字（L40：位置横向原平野風両橋） ・漢語 -2- 老人問題の漢字（L41：老族配術退効民訪顔歯） ・大学生活の漢字（L42：卒論実調必要類得失礼） ・変化動詞の漢字（L43：増加減変移続過進以美） ・抽象的表現の漢字（L44：比較反対賛共直表現初） ・抽象概念の接辞の漢字（L45：全最無非第的性法制課） [学習・教育方法] このレベルでは、漢字の音訓の読み分けを指導しながら、漢字語彙の文中での用法を教え、習った漢字語を使った読み物を用意して、読み練習をしたり、作文練習をしたりする 中級になると、書き言葉の語彙中心の学習となり、漢字の意味や書き方などは自律的に学習する必要が増えるため、その準備となる活動も行う

上に示したように、特に「漢字３」クラスにおいては、日本語は話し言葉と書き言葉のギャップが大きい言語であり、話し言葉に使われる和語と書き言葉に使われる漢語の違いがあることに着目させて訓読みと音読みの読み分けができるようにすること、「漢字４」クラスにおいては、受講者が中級になってから自律的な漢字学習および語彙学習を進められるように準備させることを目標に指導する必要がある。

２．３　初級漢字クラスにおける指導の工夫と課題

BKB vol.1 を使用した初級入門から前期レベルの漢字クラスの授業については、カイザー（2004）や鄭・柳田（2013）の報告がある。時代によってクラスの名称や内容が異なっており、カイザー（2004）は、2003 年度に「漢字１」と呼ばれていた補講漢字入

門クラス（10 週で BKB の L1 ～ L22 を使用）、鄭・柳田（2013）は、2011 年度の補講漢字入門クラス「K200」[2]（10 週で BKB の L1 ～ L11 使用、現在の「補講漢字 1」相当）に関する報告である。

カイザー（2004）の漢字クラスは、10 週で BKB の vol.1 をできるところまでカバーするという超高速スケジュールであったため、パワーポイント（PPT）による学習漢字に関するオリエンテーション的説明と、漢字語の読み練習が授業の中心であった。これは、ワープロなどの普及によって漢字を書く機会が少なくなっているという実情に鑑み、漢字を書かせるより読ませる機会を増やすべきだという授業担当者の方針による。それに対して、その 10 年後となる鄭・柳田（2013）の授業では、時代のニーズに合わせたタスク中心の練習の工夫が随所に見られ、①予習型タスク（字形推測や意味推測）、②練習型タスク（ペア読み、PPT 読み、送り仮名練習など）③宿題型タスク（テキストの読み練習、書き練習、復習シート）、④復習型タスク（ディクテーション）、⑤楽しみ型タスク（書道）といったさまざまな練習方法が提案され、それぞれに合わせた漢字の読み書きの練習シートが作られている。特に入門期の非漢字圏の学習者にとっては、書道のような楽しみ型タスクが漢字を書く活動を好きにさせる要素としてうまく機能していたように思われる。

BKB vol.2 を使用した初級後期レベルの漢字クラスの授業については、加納（2004a）と石田（2014）の報告がある。加納（2004a）は、2003 年度に「漢字 2」と呼ばれていた補講漢字クラス（10 週で BKB の L23 ～ L45 を使用する）、石田（2014）は 2011 年度 3 学期から 2012 年度 3 学期までの補講漢字クラス「K400」（10 週で BKBL23 ～ L35 を使用、現在の「補講漢字 3」相当）に関する報告である。

加納（2004a）でも、カイザー（2004）の「漢字 1」と同様に、パワーポイントを駆使して、漢字の音訓の読み分け練習を行ったり、形声文字の構成要素である音符と音読みとの関係を提示したり、反対の意味の漢字語を提示したり、漢字語の品詞や活用を提示したり、授業は読み練習を中心に行い、漢字の書きは主に宿題に任せていた。これは当時、漢字の学習は学習者自身がやるものであり、授業はガイドにすぎないという方針による。しかしながら、その 10 年後となる石田（2014）では、授業はパワーポイントによる読み練習を中心としながらも、単語だけでなく文単位で読ませる練習を増やしたり、漢字の書きについて宿題で字形のチェックと文作成練習などを行い、さらに L33 ではオプションの宿題として教室外の表示に使用されている漢字の写真をケータイで撮って来させるというようなタスクも課していることが報告された。

このように、近年の漢字教育においては、初級前期では漢字の字形的特徴を識別させるためにある程度書く練習が必要とされ、いかに楽しく書く活動をさせるかが成功のカギとなってきているのに対して、初級後期では、やはり書くことよりむしろ大量に読ま

せることに練習の中心が移っていることがわかる。しかしながら、この数年間筆者が担当している「補講漢字４」（10 週で BKB の L36 ～ L45 を使用）では、受講生の大半を占める非漢字圏学習者から「宿題だけでなく授業でも書く練習をしたい」という要望が多く出されている。以前と比べて、学習者はケータイの普及などにより教室外で読む機会が増えている一方、書く機会はほとんどないため、むしろクラスで書く練習をしたいということなのであろう。そこで、同じクラスにいる漢字圏学習者を退屈させないように、テキストにある練習をただ書かせるのではなく、それらの語彙を使って短文を作らせる練習を行い、作った文を白板に書かせて、それを他の学習者に読ませるという活動を行っている。漢字圏の学習者も自然な日本語の文作りには積極的に取り組み、また他の学習者にも読み易いように丁寧に字を書くという習慣もつくため、このようなクラス活動は漢字圏学習者にも非漢字圏学習者にも好評である。漢字の習得は学習者の自律的学習によるところが大きいため、教師側の教育方針ばかりでなく、学習者の要望に応えるという姿勢も重要であろう。

３　漢字教科書 IKB の理念と中上級漢字クラスの実践

加納（1994）には中級の漢字教育のための学習項目一覧表が示されており、これは、IKB vol.1 の１課から 10 課の授業シラバス（表３）に相当する。また、加納（2000）および加納（2002）で指摘された中上級レベルにおける漢字学習の問題点は、IKB vol.2 による上級の漢字語彙教育（表４）にも繋がっている。

３．１　IKB の開発理念

初級段階において学習者の自律的な漢字学習をうまく習慣づけることができれば、中級以降は初級のときのように１字１字を教える必要はなく、むしろ漢字を材料に、非漢字圏学習者のみならず漢字圏学習者も困難を感じている日本語の語彙力の増強を図ることが考えられる。そこで、漢字の学習を通して漢字語彙の学習を支援し促進することを目指して、IKB を開発した。

特に中級学習者を対象とする IKB の vol.1 では、漢字を学習しながら、漢字語彙の知識を字形、読み、意味、用法の面から整理し、それぞれの学習者に自らの弱点を自覚させて最適の学習方法を発見させることを目標としている。IKB の vol.1 のまえがきには次の５点が教育理念として挙げられている。

(1) 漢字学習は語彙学習である。
(2) 漢字は読み書きだけ覚えても、文中での用法を知らなければ使えない。
(3) 漢字は読解や作文など他の日本語能力と関連づけた形で学習する方がよい。

(4) 漢字の字形や読み、漢字語彙の用法などを覚えたり整理したりするために有効と思われる知識や注意点などを学習項目として立てる。

(5) 漢字の効率的な覚え方や練習方法は、学習者の文化圏、興味の対象、学習スタイルなどによって異なるので、学習者が自分に最適の方法を発見するのがよい。

そのためには、教科書のはじめに載せてある漢字力診断テスト[3]が重要な役割を果たす。初級段階では、「漢字とはどのようなものか」「どのように勉強していけばよいか」を教師がオリエンテーション的に解説することが多いが、中級では、学習者同士が互いの弱点に気づき、様々な学習方法や練習方法を試してみながら日本語の語彙の意味的ネットワークを拡張していくことが重要である。そこで、反義語や類義語のまとめ、漢語動詞と和語動詞の関係、漢語形容詞と和語形容詞の関係などを学習者に考えさせることを目的とした課を設けている（表３を参照)。また、非漢字圏学習者だけでなく漢字圏学習者にとっても弱みとなっている、漢字の読みの複雑さを整理するため、同音の漢字、同訓の漢字という課立ても行っている。さらに、初級段階では十分に機能していなかった、形声文字の音符という構成要素を音読みの強化のために積極的に取り上げ、復習の課で扱っている。また、IKB の vol.1 では、特に非漢字圏学習者のために、字形による漢字索引を採用しており、部首による漢字の整理をも試みている。

それに対して、上級学習者を対象とする IKB の vol.2 では、専門分野別に漢字および漢字語彙をまとめ、内容のある読み物を正確に読む力、類義の漢字語彙の使用上の制約などを認識し､それらを使いこなす力を養成することを目指している。各課のはじめに｢力だめし」という読み物のセクションを設け、初級漢字を使った語彙の中にも読みや意味が難しいものがあることに気づかせながら、中級の漢字語彙も復習・定着させ、さらに上級の漢字語彙を自律的に増やしていくという学習の流れになっている。練習も単なる漢字の読み書きではなく、漢字語彙のコロケーションや文法的、語用論的に適切な使い方を考えること、類義語の使い分けや対義語の知識を増やすこと、語彙の意味を別の言葉で説明することなどが学習の中心となる。

３．２　IKB を使用した中上級漢字クラスの概要

本センター―で現在開設している技能別中級漢字クラスの概要を表３に示す。「漢字５」と「漢字６」では、IKB の vol.1 を使用している。

表 3　中級漢字クラスの概要

レベル	補講漢字 5(10 週)／総合漢字 5(15 週)
中級前期	[教材] Intermediate Kanji Book vol.1 L1 ～ L5 [学習目標] ・中級の漢字語彙の読み書きを覚え、正確に運用できるようにする ・漢字力診断テストにより学習者自身が自分の弱点に気づき、それを克服するための方法を工夫できるようにする [学習項目] ・漢字の形、読み、意味、用法によるグルーピング（L1） ・反義語・対義語の漢字（L2） ・漢語動詞の用法（L3） ・漢語形容詞の用法（L4） ・同音の漢字（L5） ・形声文字の音符（復習 1） [学習・教育方法] テキストの漢字を学習するだけでなく、既習の漢字語彙の読み書き、意味用法などの運用力をつけるため、各学習者の弱点を整理する インターネットなどで学習漢字語彙を検索して読み物を探させるなど、オーセンティックな読み練習につなげる 学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習を行う
レベル	補講漢字 6(10 週)／総合漢字 6(15 週)
中級後期	[教材] Intermediate Kanji Book vol.1 L6 ～ L10 [学習目標] ・中上級の漢字語彙の読み書きを覚え、正確に運用できるようにする ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できるようにする [学習項目] ・漢語の語構成（L6） ・漢語動詞の用法 2(L7) ・漢字の音訓（L8） ・同訓語の漢字（L9） ・類義語の漢字（L10） ・形声文字の音符（復習 2） [学習・教育方法] 漢字 5 と同じ

また、本センターで現在開設している技能別上級漢字クラスの概要を表４に示す。「漢字７」と「漢字８」で IKB の vol.2 を使用している。

表４　上級漢字クラスの概要

レベル	補講漢字７(10 週)／総合漢字７(15 週)
上級前期	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L1 ～ L5 [学習目標] ・上級漢字語彙の読み書きを覚えながら、教育・心理など文系の分野、科学技術など理系の分野の語彙を適切に使い分けられるようにする ・学習者自身が読みたいものから漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できるようにする [学習項目] ・性格・心理の漢字語彙（L1） ・教育関係の漢字語彙（L2） ・新幹線と環境問題の漢字語彙（L3） ・コンピュータ関係の漢字語彙（L4） ・航空機と携帯機器の漢字語彙（L5） [学習・教育方法] テキストの漢字を学習するだけでなく、初級・中級で既習の漢字をも含めて総合的な漢字の読み書きの力をつけ、意味用法などの練習により、上級の漢字語彙の運用力をつける インターネットなどで学習漢字語彙を検索して読み物を探させるなど、オーセンティックな読み練習につなげる 学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習なども行う

レベル	補講漢字 8(10 週)／総合漢字 8(15 週) 春学期
上級後期	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L6 ～ L10 [学習目標] ・上級漢字語彙の読み書きを覚えながら、地球科学、経済・金融、歴史などの専門分野の語彙を適切に使い分けられるようにする ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できるようにする [学習項目] ・地震の漢字語彙（L6） ・火山・温泉の漢字語彙 (L7) ・経済関係の漢字語彙（L8） ・金融関係の漢字語彙（L9） ・歴史関係の漢字語彙（L10） [学習・教育方法] 漢字 7 と同じ 余力があれば、学習者に自分の専門分野の漢字語彙を集めさせ、練習問題を作らせるなどの活動を行う
レベル	補講漢字 8(10 週)／総合漢字 8(15 週) 秋学期
上級後期	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L11 ～ L15 [学習目標] ・上級漢字語彙の読み書きを覚えながら、健康・医学、栄養学・化学、物理・数学、環境科学、政治などの専門分野の語彙を適切に使い分けられるようにする ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できるようにする [学習項目] ・健康・医学関係の漢字語彙（L11） ・栄養学・化学関係の漢字語彙 (L12) ・物理・数学関係の漢字語彙（L13） ・環境問題の漢字語彙（L14） ・政治関係の漢字語彙（L15） [学習・教育方法] 上記の漢字 8 の春学期と同じ

上に示したように、中級レベルの漢字クラスにおいては、漢字圏や非漢字圏の学習者に各自の漢字学習上の弱点や困難点に気づかせ、それらを克服するための知識の整理や練習を行う工夫をすることに主眼を置いている。また、上級レベルの漢字クラスにおいては、専門分野による漢字語彙の使用上の制約や類義語の使い分け、適切なレトリックなどを考えて語彙学習を行う必要があるため、春学期と秋学期とで異なる分野の課を扱うようシラバスが設計されている。

3．3　中上級漢字クラスにおける指導の工夫と課題

まず、IKB vol.1 を使用する中級レベルの漢字クラスの授業実践については、加納（2004b）、杉浦（2010）、鄭・中尾（2015）、中尾（2016）の報告がある。

加納（2004b）は、2003 年度に「漢字３」と呼ばれていた中級漢字クラス（10 週で IKB の L1 ～ L5 を使用、現在の「補講漢字６」に相当）の報告であり、杉浦（2010）、鄭・中尾（2015）、中尾（2016）も同レベルのクラスの実践である。

加納（2004b）の漢字クラスでは、初回に漢字力診断テストを行い、そのフィードバックを通して非漢字圏・漢字圏の学習者に学習上の困難点を自覚させるところから始まる。毎週の授業では、主にパワーポイントによる各課の重要学習項目に関する解説的説明と、漢字語の読み練習をさせることが中心であった。どちらの文化圏の学生にも難しいと思われる、和語動詞と漢語動詞との関係を解説しながら自他動詞の見分けを練習したり、和語形容詞と漢語形容詞との関係を解説しながらそれらの評価的意味を考えさせたり、文読み練習を行ったりした。しかしながら、このようなやり方では学習者の反応が受身的になりがちであり、特に非漢字圏の学習者から、中級においても漢字を書く機会を増やしてほしいという要望が出され、現在の筆者担当の同レベルの漢字クラスにおいては、パワーポイントの使用よりも、むしろ学習者に白板に漢字を使った文を書かせたり、それらを読ませたり、学習者自身に用法を説明させたりしながら練習するやり方に切り替えている。中級になると、文化圏による差よりも個人差の方が大きくなる傾向にあり、漢字がよく読める者もあまり読めない者もいるため、誰とでもペアを組んで練習ができるような読み練習の工夫（紙の両面に同じ文が書いてある読み練習シートで、A 面には偶数番号の文に振り仮名、B 面には奇数番号の文に振り仮名が振ってあり、互いにパートナーの読む文の正解がわかる形になっている「ペアリーディング練習シート」）が、いつの時代にも学習者たちに好評である。学習者による自律学習の成果は、各課の宿題の最後につけてある短文作成練習に見ることができ、自作のストーリー性のある短作文や、ユーモアやジョークを交えた面白い短作文が提出されると、そのコピーをクラスでシェアすることもある。

杉浦（2010）では、グループワークによる各課の要点の説明、練習の答え合わせ、確

認などの活動を推奨している。教師がすべてを説明するのではなく、学習者が相互に説明したりされたりすることにより、他者との協働によって楽しく漢字学習ができると実体験できること、漢字の読み方がいい加減だと相手に理解してもらえないことを実感し、それによって読みが正確になることなど、いわば漢字学習を通してコミュニケーションに必要な力をつけることを教育の成果としているところが大変啓発的である。

鄭・中尾（2015)、中尾（2016）の授業でも、杉浦（2010）と同様、教師主導の漢字クラスから学習者主体の漢字クラスへの転換が図られている。初級における話し言葉中心の和語の学習から、書き言葉中心の漢語の学習へと進む際に学習者が突き当たる「中級の壁[4]」を乗り越えさせるために、教科書の使い方、クラス運営の方法を工夫していることがわかる。具体的には、授業における活動を (1) 導入セクション、(2) 練習セクション、(3) まとめセクションの 3 つに分け、導入セクションでは学習者の予習を前提に、学習者ペア（漢字圏＋非漢字圏）による「復習練習」の答え合わせをさせ、その後の学習漢字の導入に際しては、漢字圏向けシート（母語の中国語との対比により、読みや用法の違いに着目させる）と、非漢字圏向けシート（字形の構造、部首と意味の関係、音符と音読みの関係などの整理）を用意して配布するなど、さまざまな工夫がされている。また、練習セクションでは、教科書に載っている練習問題を漢字圏と非漢字圏のペアで行わせ、相互に発表、質疑をさせることにより学習者主体の授業を実現させようとしている。最後のまとめのセクションで行われるクイズや宿題のフィーバックは、学習者の力を測るというよりは、地道な復習と自律的学習を促すための動機づけとされている。いずれも、限られた期間・時間の中で行われた実践の工夫であり、鄭・中尾（2015)、中尾（2016）が漢字クラス終了後に行った学習者による振り返りシートの報告によれば、教師の様々な工夫にもかかわらず、漢字学習を学習者による自律学習につなげることがいかに難しいかも窺われる。しかしながら、学習者からの好意的反応もあり、今後も中級レベルでの一層の工夫が期待されるところである。

IKB vol.2 を使用した上級の漢字クラスについては、加納（2002）と平形（2013）の報告がある。加納（2002）は 2001 年度に「漢字４」と呼ばれていた補講漢字クラス（10 週で、1 学期は IKBvol.2 の L2、L4、L6、L8 を使用、2 学期は L1、L3、L7、L11 を使用、3 学期は L5、L12、L14、L15 を使用するという変則的なシラバスであり、レベルとしては現在の「補講漢字８」に相当する）の報告である。一方、平形（2013）は 2011 年度から 2012 年度までの補講漢字クラス「K800」(10 週で IKB vol.2 の L1 ～ L3 を使用、現在の「補講漢字７」にほぼ相当する）に関する報告である。

加納（2002）では、文系および理系のさまざまな分野で使用頻度の高い漢字語彙を扱うことにより、一口に書き言葉といっても、専門分野や文章のジャンルによって使われる語彙や用法が異なることを学習者に認識させることが重要であると指摘している。類

義語の使い分け、対概念や上位語・下位語の概念などによる語彙ネットワークを構築することなどを目標に、中級で重点項目とした形声文字の音符についても上級で再度確認するなど、さまざまなタイプの練習方法を工夫している。近年は、漢字語彙力の強化を読み書きで行うばかりでなく、音声を聞いて漢字を処理するような聴解練習にも力を入れている。さらに、同じ漢字を学習する際にも、学習者によって必要度の高い語彙が異なるため、学習者自身に覚えたい語彙を選択させることにより、語彙のコロケーションや使用上の制約などに気づかせる練習に自律的に取り組ませることができる。そもそも教科書に載っている記事や文章はすぐに古くなってしまうため、学習者には宿題として、各課の学習漢字や学習語彙をキーワードとしてインターネット検索をさせ、興味関心のある記事、クラスで読みたい記事を持ってこさせて授業での読み練習に使っており、このような工夫は、現在担当している同レベルの上級漢字クラスでも続いている。

また、平形（2013）でも、上級になったばかりの学習者を対象に、漢字語彙の拡充、様々な形式の練習活動、他の活動と関連づけた総合的練習、自律学習の促進を目指した実践の工夫が紹介されている。

以上に述べたように、中級レベルでは、学習者に漢字学習の困難点を自覚させ、効果的な学習方法を考えさせながら、和語と漢語という異なる種類の語彙の役割を理解させて語彙力の拡張を行うこと、類義語の使い分けや同音語の理解などを的確にできるようにすることなどが授業の中心となる。上級レベルにおいては、学習者によるインターネットなどを使った学習漢字語彙を含む読み物の検索や自由作文などが重要な意味を持っており、各クラスに集まる受講生たちの興味関心の方向性によって、学期ごとに全く異なる活動が行われることが多い。自律的学習の意識が高い学習者が集まったクラスでは順調に上級漢字語彙の習得が進むが、教師任せの学習態度の学習者が多いと、テキストの学習項目を追うだけの授業になってしまう場合もある。上級に至るまで自律的学習者を育てることが、初級、中級を通して大きな課題となっている。

４．おわりに

本センター―における漢字教育は、本稿で述べてきたようにレベルによって重点の置き方は異なるものの、語彙教育の一環として漢字の意味用法を教えるという教育理念が共通している。初級入門期には、表意表語文字である漢字のオリエンテーション的説明に重点を置き、特に非漢字圏学習者には書き方も丁寧に指導するが、漢字圏学習者には漢字の多読性や母語との違いに注意を向けさせ、読み練習に重きを置く必要があろう。初級前期から後期にかけて、徐々に訓読みと音読みの読み分けを練習し、文中での意味用法を教えて漢字語彙の定着を図りつつ、教師主導型の漢字教育から、少しずつ学習者主体の漢字学習に切り替えていくことが重要である。中級においては、漢字力診断テスト[3]

などによって各学習者に自分の弱点に気づかせることがその後の学習にとって重要であることを指摘しておきたい。多くの学習者の弱点とみなされる学習項目を中級では要点として学びながら漢字語彙力の増強を行い、さらに上級では、専門分野別に漢字語彙の使用上の制約や類義語の使い分けを学びながら、漢字語彙ネットワークを完成させていくことが目標となる。本センターの過去 30 年にわたる漢字語彙教育は、BKB・IKB という教材をベースに行われてきたが、将来、使用される漢字教材が変わるとしても、学習者１人１人の実態や要望に応え、時代の変化に伴う学習ニーズの多様化などにも対応して漢字教育を成功させるためには、本稿で紹介したような教育理念に基づいた担当教師によるたゆまぬ教育実践上の工夫が不可欠であると考えられる。

魏・加納（2012）のアンケート調査では、本センターで漢字を学ぶ学習者が困難点と意識しているものとして、漢字圏・非漢字圏を問わず、漢字の読み方、書き方、意味、覚え方などの中で、読み方の問題が圧倒的に大きいことが報告されている。また、学習者の学習動機としては、漢字そのものの読み書きができるようになりたいことはもちろんであるが、日本語を読む力、書く力を伸ばしたいというニーズが大きく、そのための語彙力の増強を必要としていることがわかる。同じアンケートで、聞く力を伸ばすためにも語彙力の増強がカギとなっていることが報告されており、今後の課題としては、特に漢字語彙を音声で聞いた場合の処理に注目し、漢字語彙力を読解力、作文力のみならず聴解力の増強にも役立てられるような漢字語彙教育を考えて行く必要があるのではないだろうか。そのためにも、テストなどによる評価方法、そのフィードバック方法などの工夫が必要であろう。

謝辞

今年度で本センター―を去るに当たり、本稿を書く機会を与えていただいたことに感謝します。また、多様な学習者・ニーズに合わせて、長年にわたり漢字クラスの教育実践を工夫してくださった数多くの先生方のご努力、ご協力に心から敬意を表します。

注

1. 本センター―日本語教育部門が管理しているサーバーに material というフォルダが設けられており、その中の「補講コーディネート」＞「漢字」というファイルに漢字クラス概要表が置かれている。カリキュラムは技能別漢字クラスの担当者により毎年少しずつ修正が加えられているが、非常勤を含めた日本語担当教員全員がこの概要表を見られるようになっている。
2. 2011 年度当時、日本語コースは「J100」が最も下のレベルだったが、漢字クラスは「K200」が最下位のレベルと位置づけられており、「K100」というレベルは

存在しなかった。それは、100 のレベルではまず平仮名、片仮名の習得を目標とし、漢字の指導は 200 レベルからという方針によった。

3. IKB vol.1 に載っている漢字力診断テストは、中級の漢字学習に進む前に、学習者の漢字語彙を読む力、書く力、意味理解の力、用法を 12 の評価項目（各 10 問）で診断するテストであり、その結果から学習者の弱点・困難点がわかるように設計されている。これと同様の目的で、初級、中級、上級の WEB 版の漢字力診断テストが開発され、筑波日本語テスト集（TTBJ=Tsukuba Test-Battery of Japanese、URL：ttbj-tsukuba.org）の中で公開されている。これらのテストの開発に当たっては、2015 年度～ 2017 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本語の漢字力評価の方法に関する研究」（研究代表者：加納千恵子、研究課題番号：15H03214）による助成を受けた。
4. 加納（2014）の 2013 年度春学期の授業評価アンケート報告によれば、漢字クラスについての授業評価では、初級クラスから中級クラスに上がったところで学習者の評価が一旦下がる傾向が見られ、これを「中級の壁」と呼んでいる。

参考文献

石田麻実（2014）「2011 年度 3 学期及び 2012 年度初級漢字中期クラスの授業報告　―自律的な漢字学習を促すためのクラス運営―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29 号：173-188

カイザー シュテファン（2004）「漢字 1」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』19 号：97-98

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子（1988）「基本漢字の選定」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3 号：75-93

加納千恵子（1994）「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9 号：41-50

加納千恵子（2000）「中上級者に多雨する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15 号：35-46

加納千恵子（2002）「上級漢字クラスにおける漢字語彙学習の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』17 号：47-59

加納千恵子（2004a）「漢字 2」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』19 号：103-108

加納千恵子（2004b）「漢字 3」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』19 号：117-123

加納千恵子・大神智春・清水百合・郭俊海・石井奈保美・谷部弘子・石井恵理子著／関正昭・

土岐哲・平高史也編（2011）『日本語教育叢書つくる　漢字教材を作る』スリーエーネットワーク

加納千恵子（2014）「留学生センター日本語コースにおける授業評価 ―2013 年度春学期授業評価アンケート報告―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29 号：245-282

魏娜・加納千恵子（2012）「筑波大学留学生センターにおける学習者のニーズ分析　―K200 ～ 700&J961-963 漢字の場合―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27 号：333-344

国立国語研究所（1976）『現代新聞の漢字』秀英出版

杉浦千里（2010）「第 9 章『Intermediate Kanji Book』を用いた漢字中級クラスのヒント」『日本語教師のための実践漢字指導』くろしお出版：114-128

鄭聖美・柳田しのぶ（2013）「日本語初習者の多い漢字入門クラスの運営　―タスクを中心に―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28 号：261-280

鄭聖美・中尾菜穂（2015）「2013 年度の漢字中級前期クラスの授業報告　―漢字語彙の自律学習を促すためのクラス運営―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』30 号：281-298

中尾菜穂（2016）「2014 年度の漢字中級前期クラスの授業報告 ―振り返りシートと活動評価アンケートからの考察―」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31 号：81-94

平形裕紀子（2013）「中級後期レベル（K800）の漢字・漢字語彙指導について　―Intermediate Kanji Book Vol.2 を使用した授業の実践報告―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28 号：281-290